

吉村のバトルラン

凶幽の蒙外



鬼畜！「吉村隊事件」の真相をつく

生存隊員血のルポルタージュ

元隊員

山浦

石井

浦原正

昭和二十四年四月十五日
昭和二十四年四月二十日
印刷
發行

ウランバートル 吉村 隆

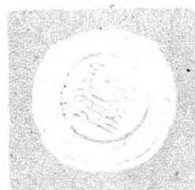
定價 百三拾円 弍式拾円

著者 山 浦 重 三
蒲 原 正 二
石 井 榮 次

発行者 堤 登
長 野 市 西 町 三

印刷者 宮 沢 安 正
長 野 市 中 村 三

印刷所 信濃書籍印刷株式会社
長 野 市 南 郷 町 六 八 九



発行所

長野市西町三

明日香書房

会員番號A二〇一〇五〇番
電話 四六五三番
長野市 五五三七番

落丁・亂丁等不完全な品がありましたらお取替致します

配給元

日本出版配給株式会社

ウルンバートル 吉村隊

＝外蒙の幽囚＝

元隊員 蒲原正二郎
石井榮次
山浦重三

－明日香書房刊－

發刊の言葉

外蒙ウランバートルにおける吉村隊の殘虐事件は、當の主人公たる吉村隊長こと本名池田重善が日本に復員してしたことによつてにわかに國民の前に大寫しされるに至つた。かつて彼の部下であつた生残り隊員達は吉村を「殺人、傷害及び横領罪」で告發し、檢察当局も動き、事件は法廷にまで發展した。果して、この事件が黒となるか白となるかは今後にかゝる話題であるが、私達はこの事件の中から反省し努力すべきことの少くないことを發見する。

卒直にいつて、私達は吉村隊長の行動には強いにくしみを感ずる。絶体絶命の窮境に追い込まれて同胞相憐れみ相助ける必要の時に、暴力と奸智とによつて人間性をふみにじり、飢えと死の犠牲の上に自己の貧慾な享樂の生活を得て來たという事實に、人間性侮辱の極端な場合を見ると、もに、これらの最早や清算された筈の日本において、実は今もなおこれと似た觀念と現實とが根深くはびこつてゐることを感じる。

平時の軍隊内部において、また警察や憲兵組織によつて、戦争中の勤勞動員の場合等々を考え

てみてもわかるようにこれらの力によつてどのような暴虐が行われ扱われて來たか。日本人による日本人への酷使と人間性圧殺が、つい敗戦のきのうまで白晝平然と横行していたのである。そしてこの事實は今日もなお「街の暴力團」の中に残つてゐる。

何故これらの憎むべき暴虐が起きたか。それは腕を失つた吉村隊員の次の言葉を噛みしめてみる時にはつきりする。

「いま思えば、彼の非行をあばくため、なぜ捕虜たちが團結しなかつたか不思議だが、だれも自分をすてゝ多数の利益に立つという氣がいにかけていたからだつた。」すなわちいかなる権力や暴力にも屈することなく人権を守るという自覺と努力、そのための民衆の勇氣と組織とを持つならば不幸は避け得られるものであることを教えているものといえよう。

本書はこのような意味からいつて、吉村隊長の部下であり、事件の核心にふれ、また外蒙幽囚の辛酸を経験して死線を越えて來た山浦重三、蒲原正二郎、石井榮次三氏の貴重な記録を現地報告の形において取りまとめ刊行することゝした。尙山浦重三氏は現在長野地方檢察廳檢事であり近く吉村隊事件の公判には本書を携えて公判廷に証人として起つ豫定である。

目次

吉村隊生還記	蒲原正二郎
序にかえて	一三
國境を越えて	一五
日の丸のネツカチーフ	二七
吉村の第一印象	三五
死を呼ぶノルム	四六
”曉に祈る“と”賽の河原“	五九
祖國への旅	七二

ウランバートルの四季

——私のきいた吉村隊の話——

石井 榮次

春..... 七九

夏..... 九四

秋..... 九六

冬..... 一〇五

外蒙の幽囚..... 山 浦 重 三

終戦の前夜..... 一二七

終 戦..... 一二三

不安の一夜..... 一三三

承德離宮への幽閉..... 一三六

平泉街道の死の行車	一三七
俘虜行・平泉出発	一四〇
ハルビン經由	一三三
ソ聯入り	一三四
ウランバートル着	一三五
就　　労	

砂利取り作業	一四三
ボイラー室の基礎掘り作業	一五三
整地作業	一五四
地下の横穴掘り作業	一五九
伐　　採	一六一
水道番	一六四
吉　村　隊	一七四

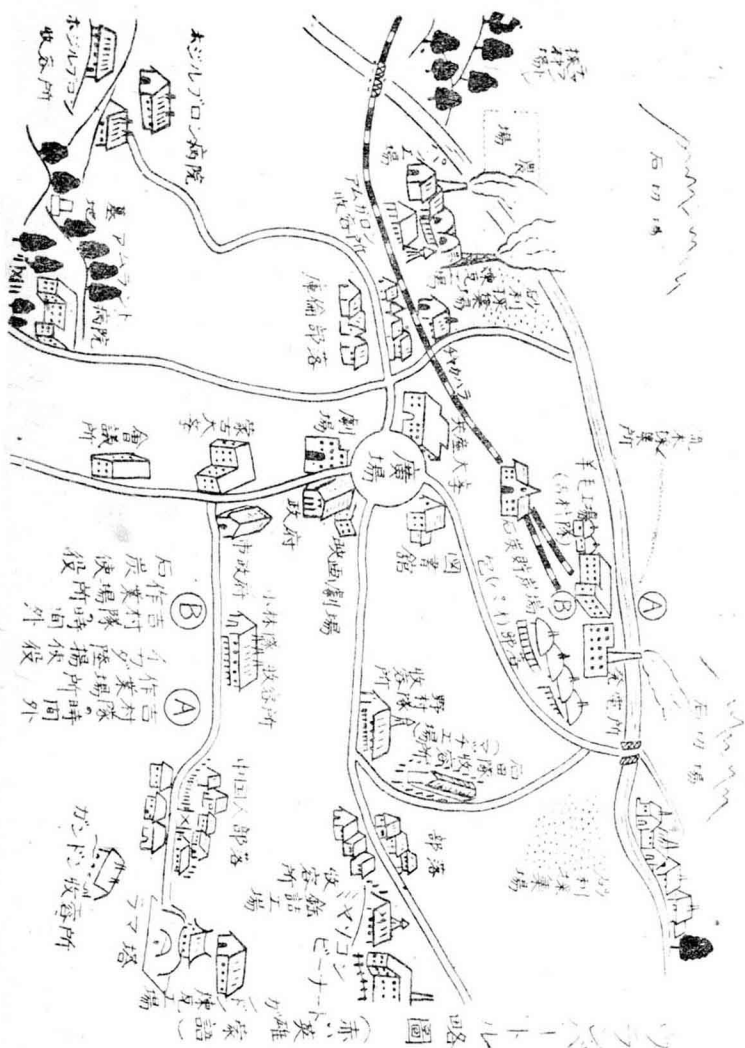
帰
還

ナ
ホ
ト
カ

函
館
上
陸

一八

一九



吉村隊生還記

元隊員 蒲原正二郎

著者 畧 歴

蒲原正二郎

- 一、長野縣立小諸商業卒
- 一、昭和十三年九月滿洲國軍中尉
- 一、昭和十八年五月滿洲國軍少佐
- 一、昭和廿年八月熱河省承德に於て終戰を迎う
- 一、現住所 長野市荒木町六八(込山方)

序にかえて

復員してからすでに一年四カ月たった。

のど元すぎれば——のたとえの通り、あの地獄そのものゝ外蒙の二年二カ月も、今では遠い昔に見た悪夢のように、私の意識から薄れようとしている。

しかし、吉村——

その男の名を思うと今でも腸の煮えるような激しい憤りが、何か肉体的な痛みに似た戦慄となつて、私の全身をつきぬける。

吉村——ウランバートルの鬼。

そうだ。あいつは鬼だ。

瀕死の同胞の血をすつて、肥えふとつた吸血の鬼なのだ。

彼に殺された二十数人の隊員たちが、最後にあけた陰惨なうめき声は、今もなまなましく私の

耳の底にこびりついている。

あゝ、あの不氣味な青ぶくれの顔、枯木のような手足、最後の呪いに妖しく燃えた白い眼——しかもその呪咀の眼差を平然と受け流して、吉村はゆつくりとパピロウスの煙を吐いていた。その高價な巻煙草も、むろん同胞の血のしずくによつてのみ、あがない得るものであつた。

鬼畜吉村は生きていた。

旧隊員たちの告発によつて、彼の惡業が明るみに出されるや、國民は憤激の声を挙げながらも、そのあまりの殘虐さに、——まさか同じ日本人が——と一抹の疑問を抱いているように見える。

しかし、事實はあくまでも事實である。私は一年六ヶ月を吉村隊員として、地獄の中に生きて來た。

こゝに吉村および吉村隊の全貌を、最もリアルに描くことによつて、吉村に対する世の批判の材料とし、さらに悲憤のうちに死んだ二十数名の同胞に対する最もよき手向けとしたいと思うものである。

國境を越えて

「おい、みんな安心しろ！日本へ帰れるぞオ！みんな立つて奉天を見ろ！」

民團車輛長の南さんが、いつもの冷靜さに似ず、はすんだ声で叫んだ。

眠っていた者もその声にピクツとして立ち上つた。ほのぼのと明けてゆく線路の果てに、奉天外の民家が見え出したのだ。

平泉で無蓋車に積まれてから三日三晩、今日は九月二十七日、承德で外蒙軍の捕虜となつて一カ月半である。

列車が駅へ着いても病人以外は下車させないのが不安の種となり、こゝでも人々の觀測は二つ分れた。このまゝ日本へ帰れるのだ、という樂觀論と、いや、きつとシベリヤへ連れて行かれ炭坑で酷使されるのだという悲觀論である。

「ダメかなア。帰りたいなあ。シベリヤへ連れてくなくて、そんな無茶なことがあるもんか。